



「佐賀ダルク」「支援する会」にお立ち
寄りください

保健師 東島ゆりか

暑い日が続きますが、みなさまお元気
でお過ごしでしょうか？
支援する会の片隅に席を置かせていた
だいている保健師の東島です。

私が「ダルク」と出会ったのは、10年
程前（いつの間にか、もう、そんな年
月が流れているのか・・・と、我ながらビック
リ！です）、私が「佐賀県精神保健福
祉センター」に転勤した年です。

当時の私は、まだ“薬物依存症”という
病気については素人同然で「違法薬物使用者」というと、当時流れていた印象的なCM～覚醒剤
やめますか？ or 人間やめますか？～を鵜呑みにした「犯罪者」「人間やめた人（どういう人間やめたって
どんな状態なのかも、考えないまま・・・）」であり、「合法薬物使用者」は「どうしようもなく意志の弱い人」
といった感覚を持っていました。そんな私が「精神保健福祉センター」での“薬物依存症対策担当となり、
とても不安だったのを覚えています。



最初の出会いは「薬物依存症の家族教室」でした。薬物依存症のご家族を対象とした教室のプログラムの
一つに、『回復に取り組んでいる当事者からのメッセージ』というのがあり、今は亡きタメさん（当
時の九州ダルク施設長）と三四郎さん（当時の九州ダルクスタッフ）が、佐賀の精神保健福祉センター
に来てくれたのを覚えています。ちょっと強面で図体のでかい施設長（本当はとってもやさしくて、
笑顔がかわいかったです）の周りで、棒切れみたいに細い身体の三四郎さんが、少々上から目線+た
め口+人懐っこくウロチョロして・・・対照的な2人が印象的でした。

そして私が薬物依存症という病気について学び「九州ダルク」に足を運ぶ回数が増えていくとともに、
私が「犯罪者」「どうしようもない意志の弱い人」と思っていた人たちは、実は“薬物依存症”という
病気の症状が作り出している姿であり、本人だけでなく、家族や親しい友人等周囲をも巻き込んで
いる現実が見えてきました。

ある当事者・相談者の声です。「薬を手に入れるためなら何でもした。いろんな人を裏切った。何度も
『もうしません。』と誓ったが、ダメだった。どんなに頑張っても、何度やめようとしても、気がつけ
ば薬に手を出している。自分が情けない。家族にも迷惑をかける。自分なんて、いっそ、いなくな
った方がましだ。」「今度こそ、薬をやめようとがんばっている。でも『どうせ・・・』『こいつは信用でき
ない。』そんな目で見られる。でも・・・頑張るしかない。でも・・・辛い。寂しい。」

ある家族の話です。「私がついていながら・・・もう疲れました。あの子を殺して・・・私も死にたい。」
「親戚にも迷惑かけ、顔向けできない。」「私の育て方が間違っていた。私がいけないんです。」「外を歩
けない。人目を避けて暮らしている。電話の音が怖い。」



Drug Addiction Rehabilitation Center

薬物依存症は、以前の私もそうであったように、社会の中では“犯罪”という色が強く（もちろん“犯罪”であることは事実ですが）“病気”という側面も持ち合わせている事が理解されていません。そのため、違法薬物についても“受刑”のみで“病気”に対するアプローチが弱いために再犯が繰り返されます。一方「違法薬物じゃなかったら大丈夫」と、処方薬による薬物依存症の問題も大きくなっています。きっと『ダメ・絶対』・・・だけでは、ダメ・絶対！！で、手を出さないという予防対策とともに“病気”からの回復への対策が伴わないと、前に進んでいけない現実が見えてきました。

その後も「ダルク」をとおして、いろんな疑問が私の中に湧いてきました。薬物依存症を引き起こした背景に何があったのか？捉え方や教育や治療の実態、性差による違い、薬物依存症者は特別なのか？回復って何なのか？回復していく人とそうでない人の違いは？人の強さと弱さ、厳しさと優しさ・・・そして、いつも最終的には『生きるとは？』に向かっていきました。当然ながら・・・私はどう生きてきたのか？どう生きているのか？をも見せつけられ「ダルクと出会わなければ良かった・・・」と辛く感じる時期もありました。

九州で最後まで「ダルク」がなかった佐賀県にも2,010年10月に「佐賀ダルク」ができました。決して、突然にできたものではなく・・・数多くの方々の足跡を繋いで、少しずつ道らしきものができて・・・そして産声をあげ、この4月からは「九州ダルク」から独立運営となり一人歩きを始めています。

“薬物依存症”は犯罪なのか？病気なのか？“薬物依存症者”は本当に怖くないのか？特別な人たちではないのか？“薬物依存症からの回復プログラム”って何をやっているのか？・・・それらを知ろうと「ダルク」に足を運ぶ中で、以前は偏見だらけだった私の理解は変化し、「ダルク」やそこに集う人たちと出会うことで、たくさんの愛と希望、厳しさと勇気をいただきました。

最近、高校生になる私の娘からこう言われました。「お母さんがトキちゃん（現・九州ダルク施設長）たちと出会ってなかったら、きっと私、いろんな問題や病気を持つ人に対して『自分とは関係ない』って思った。・・・私、人と関わる仕事がしたいな～。」

この「佐賀ダルク・むつごろう便」を手にとっている皆様も、ぜひ一度「佐賀ダルク」や「支援する会」をのぞいていただければ・・・と思っています。お待ちしております。



2年前に行われた「子育て支援セミナー」にて仲間と共に
DARCをずっと支えていただいています。（左端）東島さん

佐賀新聞

佐賀のニュースサイト

佐賀のニュース

NEWS

【現場に行く】脱薬物依存へ 佐賀ダルク

薬物依存症からの回復を支援する民間リハビリ施設「佐賀ダルク」。活動開始から2年半が過ぎ、今年4月からは佐賀市にスタッフが常駐、初めて入寮者を受け入れ、活動を本格化させている。「犯罪」の側面だけでとらえられがちな薬物依存に「病気」として向き合い、同じ苦しみを経験した仲間として手を差し伸べる。そんな回復プログラムに密着した。

佐賀市北川副町。薬局の空き店舗が佐賀ダルクの拠点だ。これまで福岡からスタッフが通って相談などを受け付けてきたが、4月からは責任者の松尾周さん（44）が常駐。「電話があれば、すぐ対応できるメリットは大きい。待たせてしまえば、行方が分からなくなることもある」。薬物依存症の患者は、自宅にさえ戻れない状況に陥っている人も多く、ダルクへの電話は、追い詰められた末の深刻な「SOS」でもある。

現在、松尾さんと共同生活を送っているのは5月に入寮した男性マコさん（45）。ここでは互いにニックネームで呼び合う。自分を客観的に見つめる効果があるのだという。入寮は強制ではなく、自らの意思で、同じ経験を持つスタッフや仲間と約1年間、回復への考え方や体力を身に付けていく。

午前10時、「ミーティング」と呼ばれるプログラムは、リーフレットの朗読から始まった。「依存症のマコです」。そう告げてから読み始めるのがルール。依存症を認め、一人ではやめられないことを毎日確認する。読み終わると、「苦しむ仲間のために」と15秒間黙想する。

ミーティングは言いつばなし、聞きつばなしが基本。後で評価することも、外部に話すこともない。

マコさんは自身の過去を語り始めた。先輩に初めて覚せい剤を打ってもらったのが20歳。以来、クスリ欲しさに何度も罪を犯してきた。「やめられない自分に嫌気が差していた」。他人の視線が異常に気になり、自己否定が続く。5度目の服役中、ふとんをかぶって舌をかみ切った。死ねなかった。

3年前に出所。しばらくはやめていたが今年1月、薬物依存の治療で通っていた病院で昔の仲間に偶然会い、再び覚せい剤に手を出した。どん底まで苦しんだ末、ダルクにたどり着いた…。

午後のミーティングは、体力づくりや農作業など、曜日ごとに内容は変わる。この日、松尾さんは20種類の顔の表情が描かれたプリントをマコさんに見せた。

「1カ月前の顔はどれ?」。マコさんは、への字口で眉をひそめた顔を選んだ。「人間関係に困り、行き詰まった顔」。順に今の顔、1カ月後の顔を選んでいく。

「自分のことを分かってくれない」と周囲を責めるのではなく、冷静に自分の感情を把握し、うまく他人に伝えられるようにする訓練。マコさんは1カ月後の顔を、得意げな落ち着いた顔を選んだ。「少しは納得した自分でいたいね」と笑顔を見せた。

午後3時過ぎ、ミーティング終了。夜、自助グループに参加するまでの間はプログラムはない。「たばこを買いに行きませんか」。マコさんが松尾さんに声を掛けた。マコさんはまだ、財布を持つことが許されていない。金銭の管理は松尾さんが行っている。

共同生活をする2人は、常に行動をともしにする。「クスリが欲しくなる衝動や、やめられない苦しさが分かるのは経験者だけ」と松尾さん。

依存症は長年の薬物使用で脳に依存の回路が生じ、自分でコントロールできなくなる精神疾患。「やめ続ける」ことが回復の唯一の手段だが、家族でさえ「意志が弱いだけ」と理解がないケースも。松尾さんは「一時期、家族と離れても、徹底的に回復に向かう時間が必要」と訴える。

「今でも夜になると『死にたい』と思う」。たばこをくわえながら、マコさんが漏らした。いまだ、自分が回復できることを信じられないこともある。「プログラムは始まったばかり。ゆっくりでいいんです」。そばでは、回復を実現した松尾さんが見守る。

佐賀ダルクは電話0952(28)0121。

■県内の薬物犯罪 再犯率は8割超

佐賀県警が2012年に覚せい剤取締法違反容疑で摘発したのは103件81人で、全薬物犯罪の9割以上を占める。再犯率は8割を超え、06年以降は6割以上で推移。高い常習性を裏付けている。

組織犯罪対策課によると、覚せい剤による摘発のうち、暴力団組員は36人。再犯者は66人で、再犯率は過去10年で最高の81・5%だった。大麻などを含む全薬物犯罪の摘発件数は113件84人で、10年前の248件176人から半数以下に減っている。

薬物依存症については、肥前精神医療センター（神埼郡吉野ヶ里町）で、医師や看護師らが、テキストやワークブックを使った回復プログラム「SHARP」（12週間全24回）を週2回実施しているほか、4週間の入院で断薬に向けた治療を実施。県精神保健福祉センター（小城市小城町）では、精神科の医師や保健師が相談に応じるほか、家族教室を月1回開いている。

2013年06月10日更新

Drug Addiction Rehabilitation Center

全国的にも薬物依存症という病気は、やっかいな病気と見られるのか精神科でもなかなか受け入れてもらえません、そのようななか佐賀には独立行政法人国立病院機構肥前精神医療センターという病院があり DARC のメンバーも 2 週間に一度の通院、回復にとって医療的なサポートも必要不可欠なものです。

佐賀 DARC では、肥前精神医療センターで行われている、SHARP【Matrix モデルに基づいた薬物依存症外来プログラム】や佐賀 DARC メッセージミーティングにも毎週木曜日参加しています。

先日は、思春期病棟の子供達とのバトミントン大会へお呼ばれして参加してきました。

大人 VS 子供達の対抗戦で何としても大人の体裁を保ちたいところですが、薬物止めたての仲間もかなり年齢的にいっている仲間も足元はふらふらで勝ったり負けたりがいい勝負。

結果的にはなんとか大人の面目を保ち勝つことが出来ましたが勝ち負けよりも、子供達の可愛らしさと運動苦手な子供が何度も何度もサーブを失敗しても一生懸命やっている姿に仲間達は「頑張れ～」と心の中で応援していたと話していました。

次回はバレーボールの予定です。



フットサルの試合に参加しました、仲間と武雄市のフットサル場へ。

佐賀弁護士会の方々には薬物問題だけではなくスポーツをとおしてもお付き合いさせていただいています。

一般の大会への参加ということで、参加者は佐賀県内の様々なチームが集まっていた、年齢的に自分の半分くらいの年の人がかなり。

で、4 試合。無謀… 現在 44 歳 無謀… 何度も足がつるかと思いましたが弁護士会の皆さんの頑張りでなんとか最終試合だけは勝利することができました、1 得点 1 アシストと聞こえは良いですが年を痛感しました。

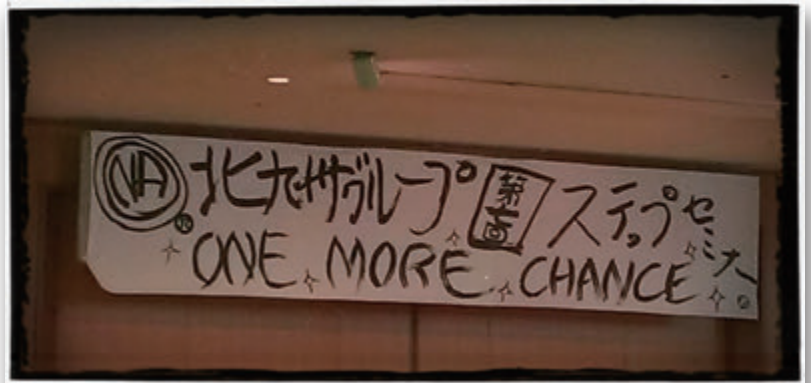
毎回、自分ごとばかり書いていますが早く仲間達も体力的に回復して参加して欲しいところです。

いつも社会参加の場所を与えてくださる弁護士会の方々には心より感謝です。



みなさんこんにちは、依存症のまこです。
先日6月22日にNA北九州グループ主催で
北九州市のウエル戸畑の会議場において第
7回のステップセミナーが開催されました。

僕達も午前中の早い時間から佐賀を出発し
て会場には一番乗りでした。少しづつ人も
集まってきたのですがDARCに繋がって1ヶ月
の僕にとっては初めて会う人達ばかりで、
しかもアディクト（薬物依存者）ばかりと
いうことなので興味と緊張が入り混じって
軽い興奮状態でした。



元来引っ込み思案の僕は案の定、初めて会った仲間達にうまく挨拶を交わすことも出来ず喫煙所の
隅っこに座り込んで興味の無い素振りを決め込んでいましたが、九州DARCから手伝いに来てくれている
仲間が自分の知り合いをわざわざ僕のところまで引っ張ってきて紹介してくれたりして、そんな仲間
の思いやりに緊張もほぐれていきました。

みんなが揃う頃には会場には異様とも言える静かな熱気が渦巻いていて、ミーティングが始まりス
ピーカーによるトークではいつものミーティングでは聞けないような、やっぱり人間って自分の責任
取れる範囲の中ならなんでも有り、自由なんだなってとても印象的でした。

でもNAに繋がっている間だけは少なくとも薬物抜きに新しい生き方にチャレンジし続ける仲間と
共にあるのだと強く感じ、少し勇気をもらった気がしています。

今回はこのステップミーティングに参加できてとても幸運でした。

これからもこのような機会があれば積極的に関わっていきたいと思います。

自分が変わるための、きっかけはどこに転がっているかわかりませんし、出会いを大切にしていこう
と思っています。

佐賀DARCのプログラムは、朝の掃除から始まり午前中のミーティング
(グループワーク) 食事作り (みんなよく食べます)
午後は曜日により様々です、ステップワークのミーティングもあれば図書館
へ行ったり体力づくりをやってみたり。



佐賀DARCの近くにサイクリングロードがあり、仲間と自転車で20分位
の所にある昇開橋へ行ってきました。景色を眺め管理人のおじさんの駄洒落
をおりませた解説に笑いしらすで楽しむ事を経験しています。

楽しみないところに◎復はないとよく言われましたが、佐賀DARCではよ
く食べよく笑い、今日だけ薬物抜きに人生を味わおうとプログラムを行って
います。



筑後川昇開橋 (ちくごがわしょう
かいきょう、Chikugo River Lift
bridge) は、日本国有鉄道(国鉄)佐賀線に存在し、
筑後川をまたいで福岡県大川市と佐賀県佐賀市
諸富町(廃線時・佐賀郡諸富町)を結んでいた
鉄道用可動式橋梁である。佐賀線の廃線後も保
存され、現在は歩道橋として活用されている。
旧筑後川橋梁(筑後川昇開橋)として重要文化
財および機械遺産に指定されている。

